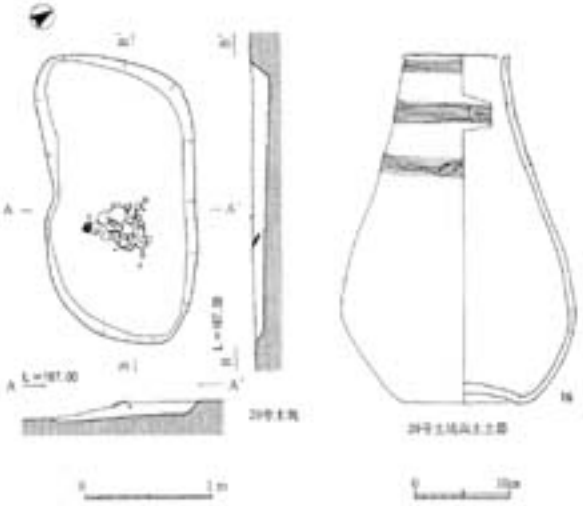
を施文するものがある。外面に山形押形文の地文の上から櫛（篦か？）による凹線文を重ねて施文するもの，外面には丸みを帯びた山形押形文が施文され，口縁部上部に凸帯気味の張り出しが作られ，そこから口唇部の内面にかけて角の付いた山形文が施されるものなどがある。また，外面は無文（外反が強いためか）で，口唇部と内面に山形押形文が施文されるもので，口縁部を少し欠くが，頸部，胴部，底部の壺形土器の器形が唯一判明するものがある。そのほかに，外面全体に菱形文を施文するが，最下部の底部側面は施文されないものもある（熊県教委 1990）。

天道ケ尾遺跡は，早期の遺物が最も多く，押型文土器期，手向山式土器期，平栫式土器期，塞ノ神式土器期のものがみられる。その中で壺形土器として35点が提示されている。

山形押型文土器は，外面は縦位に施文し，口縁部内面は横位に施文する。「く」字に外反する口縁部外面に横位の沈線文を施文し，それ以下には縦位の撚糸文を施文するものもある。外面にはヘラ描きの曲線文を施文し，口唇部には短沈線（刻目）を施すものもある。頸部外面に綾杉状の凹



第４図　灰塚遺跡の壺形土器出土状態
〔原図＝熊本県教委2000より〕

線文を施文するものや頸部外面に櫛状施文具による浅い曲線文を施文するものもある。口縁部は直行気味であり，外面に地文として縦位の山形押型文を施文し，口唇端部と頸部に斜位に刺突文を施した凸帯文を３条巡らすものもある。口縁部は若干「く」字に屈曲し，外面に地文として縄文（ＲＬ）を施し，口縁外面には斜位に刺突文を施した凸帯文を４条巡らすものもある。口縁部が僅かに外反し，地文には撚糸文を施文し，斜位に刺突文を施した凸帯文を４条巡らすものや凸帯文間は，撚糸文の上から鋸歯状のヘラ描き沈線文を施文するものもある。口唇平坦部に半截竹管文による三日月型の刺突文を巡らすものや，口縁部が外反した外面に斜位に刺突文を施した凸帯文を３条巡らすものなどがある（熊県教委 1990）。

瀬田裏遺跡は，ゴルフ場建設のため大津町教育委員会が昭和63年５月から緊急調査を実施した縄文時代早期の押型文土器期の大遺跡である。壺形土器は，高さ約26cm，最大胴部23cmの大きさで，胴腹部に径約８mmの穴が一個開くタイプのものである。これまでのところ，形状や大きさがほぼ同じのもので，いずれも胴腹部に注ぎ口状の穿孔が存在する三個の壺形土器が出土している。器面には，全面に押型文が施文上されている。ここでは，南九州の壺形土器と形態が異なるところから，ここで取り扱う南九州の壺形土器からは除外して考えた。

灰塚遺跡では，壺形土器の特徴がみられるものが484点出土している。また，35基の土坑中，27号，28号，29号，34号の４基の土坑から壺形土器が出土している。特に，29号土坑から出土の壺形土器は完形に近い資料で，遺構中央部でほぼ床面直上での出土である。鹿児島県上野原遺跡や城ヶ尾遺跡とは異なり，楕円形の一周り大きな土坑の中央寄りからの壺形土器の一括出土であり，土坑に埋められた壺形土器として，興味ある出土状態を示している（熊県教委 1990）。

（４）長崎県の出土例

長崎県の壺形土器は，有明海に面した熊本県寄りの島原半島の百花台遺跡の１遺跡であるが，これ以南の地域でも今後発見される可能性は高い。

百花台遺跡では，在地の資料中に塞ノ神式土器の壺形土器片が２片出土していることが報告されている。いずれも肩部付近の破片で，４本単位の刻目をもつ微隆起線を貼付するタイプである。筆者が栫ノ原式土器と呼ぶ深鉢形土器にみられる微隆起線文と同一であり，この段階の時期に該当する。今のところ北西限の分布を示す資料である（古門 1990）。

３　壺形土器出現の時期と変遷

縄文時代早期に該当する壺形土器の出土例の主な遺跡を紹介したが，早期後半の手向山式土器期から栫ノ原遺跡期の数型式に壺形土器が伴出することが判明した。これらの壺形土器は，個々の形態を比較するとバリエーションが若干みられるようである。

ここでは，型式学的序列に従って，押型文期以降にみられる壺形土器の形態上の特徴を抽出して検討し，その変遷を追ってみたい。

先に11遺跡の出土例を分析し，壺形土器の存在する土器型式を３期に分け，Stage１からStage３への移行を示した。さらに，口縁部を中心にＡ，Ｂの２種類の器形が存在することを明らかにした（新東1991）。Stage１は手向山式土器，Stage２は平栫式土器，Stage３が栫ノ原式土器であり，Stage１からStage３への移行を想定した。

その後の土器編年上の新型式土器の発見と壺形土器の追加例をみると，手向山式土器と平栫式土器の間に天道ヶ尾